

作品タイトル 死神の告白

著者名 北嶋征生

あらすじ

生きる意味を見いだせず、自殺の名所である岬を訪れた青年は、死神を名乗る男に出会い、死を覚悟する。だが、死神が語り始めた意外なエピソードに引き込まれていくうちに、希望が芽生え、自殺を思いとどまる。青年が立ち去った崖に一人残された死神の男は、海に向かって「真実」の告白を始める――。

本編文字数 4396文字

岬に近づくにつれ、通りの外灯の数が減っていった。初めて降り立つ最寄り駅から、既に一時間ほど歩いている。桜の季節がもう間もなく訪れようとしているが、陽はまだ短く、目的地に到着した頃には、すっかり辺りは漆黒の闇に包まれていた。

確かに、人生の最期に相応しい場所だな……。

青年は一步一步、疲れた足を引きずりながら断崖の先端まで進んだ。しゃがみ込み、恐る恐る下を覗いてみる。糸くずのような白波がゆつくりと打ち寄せ、微かな音を立てていた。

ふと、背後に気配を感じ、青年は振り返った。痩せた年配の男が、こちらに向かって足音一つ立てずに歩いてくる。すぐそばまでやってくると、傍らの岩に腰掛け、無言で海の方に目を遣った。

「あの……何かご用でしょうか？」

青年は堪らず、男に声を掛けた。

「まあ、ご用と言えば、そう言えなくもないですが――」

男は視線を海に向けたまま、低く響きのいい声で答えた。どこか異次元から聞こえてくるようにも思えた。

「ああ、わかりました。あなたは僕を引き留めに来たのですね。ここは自殺の名所だから。お気持ちは有り難いですけれど、何を言われても僕の気持ちは変わりませんよ。もう決めたことなので」

平凡な家庭に生まれ、平凡な子供時代を「感動」や「熱中」という類いの感覚とは無縁のまま過ごしてきた彼は、社会へ出る前に自ら命を絶つ決意をした。彼には、これまでの人生やこれからの人生

に、生きる意味や価値というものが、どうしても見いだせなかったのだ。

「何か、勘違いされているようですね……」

男がやはり低い声で答えた。

「勘違い？」

「ええ、私はあなたを引き留めるつもりなど毛頭ありませんよ」

「ということは……もしかしてあなたもここへ死ににやってきたのですか？」

「いや、私にはそんな必要ありませんから。既に死んでいるようなものですし……」

「それじゃあ、一体何だというのです？」

青年は柄にもなく、少し声を荒げて男を問い詰めた。

「私は、死神ですよ」

「し、死神？」

「ええ」

男はようやく青年の目を見て答えた。

「死神が、私に何の用です？」

「それは、あなたの死期が来たのでお迎えに参上したまでです」

突然現れた奇妙な男のせいで、青年は自分が自殺するつもりだったことをすっかり忘れていた。

「そうだ。僕はここから飛び降りるために訪れたのだ……。死神ということは、あなたはあの世からやってきたのですか」

「まあ、そんなところですよ。死神といっても私はただの下っ端で、

路上勧誘している居酒屋店員みたいなものですが……」

「他にも、あなたみたいな役割の死神がいると？」

「ええ、お客さんの取り合いですよ。ノルマを達成しないとサービス残業が増えるだけですから」

「何だか死神の世界も大変そうですね……。まあ、それはともかく、あなたがいち早くここへやってきたということは、僕が死ぬのはもう決まったようなものなのですね——」

青年の問いかけに、死神の男はかぶりを振った。

「いえいえ、そうは簡単に事は運ばないものでして。私なんかはこのところ、死亡確実の見込客が土壇場で命拾いしてしまうケースが続いていて、少々うんざりしています」

「土壇場で命拾い……それって、どういった経緯でそんなことになるんですか？」

興味を持った青年は、思わず死神の男に訊ねた。

「うーん……。まあ、ここだけの話ということで特別に教えてあげましょう。昨日は、急行電車に飛び込むはずだった若い女性が、運転手が寝坊で遅刻したために、ダイヤが乱れ、その間に彼女の気が

変わって未遂に終わりました」

「遅刻した運転手のおかげということですか？」

「運転手が寝坊したのは、前の晩の些細な夫婦喧嘩ですから、奥様も一役を買っているといえるかもしれません」

「なるほど……」

「一昨日は、ゴルフの最中、心臓発作で亡くなる予定だった会社社長が一命を取り留めました。私は死亡が確実だと見込んで、ギヤラリーみたいにならずと後をつけて回っていたのですが、たまたま同じコースを回っていたプレーヤーに心臓外科の名医がいたのです」

「それは運がよかった。死神の予測も絶対ではないのですね」

「ええ。ただ言い訳させてもらいますと、このケースも背景に予想外のことが起きていたために私は空振りさせられたのです。その日、元々ゴルフをする予定だったのは、心臓外科医の同僚の方だった。けれどもその同僚の息子がバイクで転倒して大けがを負ってしまい、急遽、メンバーが交代することになったのです」

「じゃあ、転倒事故が起きていなかったら……」

「会社社長は助からなかったはずです。同僚の医師の専門は、呼吸器系の方でしたから」

「命拾いの裏に、そんな事実が隠れていたなんて……」

青年は、驚きで言葉が続かなかった。呆気にとられている彼を横目に、死神の男はさらに話を続けた。

「三日前には、こんなこともありましたよ。塾帰りの女子高生が、工事中のビルから落ちてきた鉄骨の直撃を受けて即死する予定だったのです。ところがその子が通りを歩いているとき、たまたま早足で彼女を追い抜こうとしていたサラリーマンが、大きなくしゃみをした。女子高生は思わず飛び退けるようにサラリーマンから離れた。おかげで彼女は鉄骨の命中を免れました」

「くしゃみ一つで彼女の命を救ったというわけか……奇跡的な出来事ですね」

「それでもありませんよ、人は平凡な日常を送っているようでも、意図せず、時折誰かの命を救っているものです。夫婦喧嘩をした奥様や、バイクで転倒した息子さんのケースなんかは、自分の預かり知らぬところで人助けに関わっているわけで、一生その事実を知ることもないでしょう。まあ、それを私が口外するのは、本当はルール違反なんですけれど……」

「なら、どうして僕に教えてくれたのですか？」

「それはですね……先ほども言いましたが、もう、うんざりしてるわけですよ、死神っていう仕事。きっちり調べて後を追い続けていても、土壇場で事態がころころと変わってしまう。体力的にもきついで、いい加減内勤の事務作業にでも代えて貰おうと思ってい

まして」

「あの世には、そういう仕事もあるんですね」

「まあ、色々。というわけで死神の仕事はあなたで終わりにしようかなと」

「なるほど。僕は記念すべき最後のお客というわけか」

「見込み通りあなたが死んでくれたらの話ですけど……。あ、ちなみについさつき、あなたも一人、命を救ったばかりですよ」

「この僕が？一体どこで、誰をです！？」

「岬に来る途中、あなたは車道を渡ろうとして、途中で一瞬立ち止まったでしょう」

死神に指摘され、青年は自分の行動を振り返った。正直、頭の中は自殺のことで一杯だったからよく覚えていない。通りの途中で立ち止まったというならそうかもしれない。

「あなたに気づいたトラックの運転手がスピードを落とし、その先の交差点で轢かれるはずだった小学生の女の子の命が助かってます」

「本当ですか！」

「ええ、女の子に張り付いていた死神は苦笑いしてましたけれど」

この僕が、子供の命を救った……

こんな自分にも、生きている意味があったのか。

青年は、生まれて初めて充実感というものを味わった気がした。

「あの……死神さんには申し訳ないけれど、今日の所は帰りますもう一度、人生について、ちゃんと考えてみようと思います」

そう話すと、青年は街の方へ引き返していった。

月明かりに照らされた彼の目は、微かに希望の光が輝いているようにも見えた。

\*

青年の姿が消えるのを見届けると、死神の男はおもむろにスマートフォンを取り出し、電話をかけた。

「ああ田中君？今終わって、そっちに彼が向かっているから。フォローをよろしく頼む」

「神谷さん、また引き留めの説得に成功したんですね。今回は一体どんな話を？」

「まあ、色々ね。今日は若い頃に劇団をやっていた経験がちょっとは役に立ったかもしれないな……」

「神谷さん、人生経験、豊富ですものね。神谷さんみたいな人が参加してくれて本当に良かったです。ありがとうございます——」

確かに、神谷の人生は平凡とは言い難かった。学生時代に劇団を立ち上げ、演出や脚本、そして自ら主演も務めた。大学卒業後は就職もせず、バイトをしながら演劇の世界での成功を目指し、創作と芝居に没頭した。だが三十を過ぎても結果が出ず、ようやく才能の限界を思い知った彼は、主催していた劇団を解散し、小さな建設会社で働き始めた。そして二年後には職場で知り合った女性と結婚し、新たな命を授かった。目の中に入れても痛くない、愛らしい娘だった。

人並みの幸せな人生が、ずっと続くものだと思っていた。けれども現実とは違った。最愛の娘が、小学校に入学したばかりの年に前方不注意のトラックに轢かれ、あまりにも短い生涯を終えることとなった。

絶望の中、不幸は続いた。働いていた建設現場で死亡事故が起きてしまったのだ。工事中のビルの鉄骨が落下し、通行人が巻き添えになった。現場監督として業務上の過失を問われた神谷は、裁判で有罪となり、会社も退職せざるを得なかった。

なんとか系列の不動産会社で営業の職を得たが、今度は、娘を亡くして以来、長年の心労が重なっていた妻を不幸が襲った。キャディーとして働いていたゴルフ場で、心臓発作を起こし、命を落としたのだ。一緒にグリーンを回っていたお客の中にたまたま医師もいたが、心臓は専門外で、一刻を争う状況の中、適切な処置を受けることはできなかった。

四十を過ぎで独り身となった神谷は、廃人のように心を閉ざし、職場と自宅を往復するだけの日々を過ごした。これといった趣味や友人も持たず、休日は部屋に籠もりきりで、ぼんやりと時計の針が進むのを眺めていた。

やがて定年で会社員生活を終えた神谷は、生きるための唯一の言い訳だった仕事も奪われ、途方に暮れた。

そんな折、近所のスーパーの掲示板で、偶然、自殺防止のボランティア活動などを行うNPO法人の募集広告を見かけた。神谷は、藁にもすがる気持ちで事務所の扉を叩いたのだ。

無報酬で活動の手助けを続けて2年が経つ。今は若手スタッフの田中と、このスポットの監視を担当している。

電話を切った後も、神谷は崖の上で暫く佇んでいた。そして、そつと呟いた。

「礼を言うのはこっちの方だよ。今の私には、人の命を救っているという、ある種の自尊心を満たす以外に、生きる術は無いのだから……。たとえばそれが、願望にまみれた妄想で作り上げた世界だった

としても——」

夜の海に放たれた彼の言葉は、誰の耳にも届くことはなかった。

〈了〉